

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 12 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720224

研究課題名（和文）動機づけの視点を活用した到達目標型英語プログラム

研究課題名（英文）A goal-referenced English program based on the perspective of motivation theory and research

研究代表者

廣森 友人（HIROMORI TOMOHITO）

明治大学・国際日本学部・准教授

研究者番号：30448378

研究成果の概要（和文）：

本研究では、第二言語学習に影響を与える個人差要因のうち、とくに動機づけに焦点をあて、動機づけを高めると想定される指導方法（動機づけ方略）との関連を調査した。近年の動機づけ研究は教室での学習場面そのものを研究の対象とすることを通じて、より具体的な教育的示唆を提示しつつある。しかし、そのような研究成果が実際の指導実践やカリキュラムの改善に十分に活かされるためには、調査の結果を積極的に利用して、その後の教育改善に直接的に役立てる必要がある。そこで、本研究では、学習者の動機づけと動機づけ方略に対する評価を診断的に活用し、その後の指導実践の改善を目指した。結果として、動機づけが停滞した学習者にも改善が見られるなど、一定の成果が得られた。

研究成果の概要（英文）：

Recent research investigating how the motivation to learn English can be enhanced has included several studies that discussed numerous motivational strategies. However, in order for the outcomes of these studies to be fully utilized in actual classroom settings, they need to be used diagnostically and applied directly to the subsequent educational as well as curriculum improvement. This study examined how English learners perceive motivational strategies, and whether instructional practice in keeping with the appraisal of these perceptions influences their motivation toward English learning. The results showed that (1) learners with different motivations appraised the effectiveness of motivational strategies in different ways, and (2) less motivated learners seemed to benefit the most from the instructional practice using motivation diagnosis as references. Based on the results, some educational implications and directions for future research are provided.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：動機づけ、動機づけ方略、個人差、到達目標、学習方略、学習者信念

## 1. 研究開始当初の背景

第二言語学習の成功や失敗を考える上で、学習者の個人差が果たす役割についてはこれまで繰り返し指摘されてきた (Dörnyei, 2006; Ellis, 2004; Robinson, 2002)。例えば、Dörnyei (2006) では個人差要因の中でもとりわけ言語適性と動機づけは第二言語習得の成否に大きな影響を与えること、具体的には学習達成度との間には一貫して  $r = .50$  あるいはそれ以上の相関があることを確認している。さらに、Masgoret & Gardner (2003) ではメタ分析の手法を用いて、第二言語の授業における成績と動機づけとの間には  $r = .37$  程度の相関があること、すなわち、動機づけは成績変動の約 14 パーセントを説明することを明らかにしている。これらのことは、第二言語の学習を進める上で、動機づけは重要な位置づけを占めており、効果的な指導を展開する上ではとりわけ考慮すべき要因であることを示している。

上記のような認識を受け、近年の第二言語学習に係る動機づけ研究はより教室場面へとその焦点を移しつつある (廣森, 2010)。なかでも、どのようにすれば第二言語学習への動機づけを高めることができるのか、言い換えれば、第二言語学習者を動機づける理論の構築といった、より実際的な問題を直接的に扱った研究が増えつつある (Dörnyei, 2001; Dörnyei & Csizér, 1998; Guilloteaux & Dörnyei, 2008; Williams & Burden, 1997)。例えば、Dörnyei & Csizér (1998) は、語学教師 200 名を対象とした調査から、「第二言語学習者を動機づける 10 カ条」をまとめている。また、Williams & Burden (1997) では、心理学における先行研究の調査から、教室における第二言語学習者の動機づけを高める要因に関して、包括的な枠組みを提案している。具体的には、「課題に対する内発的興味・価値認識」、「達成感」、「自己概念」といった内的要因 (internal factors) に加え、「重要な他者」、「学習環境」、「教室を越えたコンテキスト (家族のネットワーク、地域の教育システム)」など、外的要因 (external factors) も取り込んだモデルを提案している。

しかしながら、それらの研究成果が実際の指導実践に十分に活かされているかと言えば、必ずしもそうとは言い切れない。例えば、いわゆる「プレーポスト」テストを用いた従来の動機づけ研究では、プレーポストにおける動機づけの発達・変化を記述したり、特定の教育介入の効果を検証したりするものが大半を占め、プレテストの結果を積極的に活用して、指導実践の改善に役立っているものはほとんど見られない。動機づけ研究と実際の指導実践を有機的に結び付けるためには、

研究で得られた知見をより直接的に教育改善 (具体的には、英語プログラムの改善) に利用し、またその成果を検証していくといった循環的プロセスが必要となる。

## 2. 研究の目的

上記の背景から、本研究では学習者の動機づけと動機づけ方略に対する評価を診断的に活用し、その後の指導実践の改善を目指すことを目的とした。

## 3. 研究の方法

### 3. 1 調査協力者

本研究に参加したのは、必修科目として英語の授業を受講する大学 1 年生 70 名であった。対象となった授業では、リーディング力の育成に焦点をあてつつも、4 技能を統合的に結びつけ、向上させることを意図した指導が行われた。協力者の英語力は、TOEIC®-IP において平均 476.2 点、標準偏差 113.1 点であった。

### 3. 2 調査方法

本研究では 2 種類の質問紙尺度 (英語学習に対する動機づけ尺度、英語学習に対する動機づけ方略尺度)、ならびにインタビューを用いた調査を実施した。後者の調査は、類似した動機づけ特性を有する学生をグループ化し、それぞれのグループから無作為に学生 1 名ないし 2 名を抽出して行った。インタビューは個別に各 30 分程度ずつ、内容は事前に準備した質問項目 (例: 「英語の授業は楽しいか?」、「普段は英語をどのように勉強しているか?」、「どんな時、英語を勉強するやる気が高まるか?」、「この授業に〇〇を加えれば、さらに英語力がつくのでは?」など) を中心に実施した。

### 3. 3 手続き

調査対象となったのは、半期 15 回の英語授業 (中心はリーディング) であった。第 1 回の授業では、授業の概要説明を含むオリエンテーションとともに動機づけに関する調査 (所要時間約 3 分) を行った。そこでの調査結果をもとに、類似した動機づけ特性を有する学習者グループの同定を行った。つぎに、第 7 回の授業では、それまでの学習成果の確認と課題を整理するための中間テストを行うとともに、2 回目の動機づけ調査、ならびに動機づけ方略に関する調査 (所要時間約 15 分) を行った。さらに、第 8 回、第 9 回の授業が行われる週の授業以外の時間には、先に同定した学習者グループから無作為に学習者を抽出し、個別にインタビュー調査 (所要時間 1 人につき約 30 分) を行った。第 8 回以降の授業では、先述した調査、ならびにイ

インタビュー調査で得られた結果を診断的に活用し、学習者の動機づけに配慮した形でその後の指導実践を計画・実施した(詳細は、後述)。最後に、第15回の授業では、半期15回を通じた学習成果の確認と課題を整理するための期末テストを行うとともに、3回目の動機づけ調査(所要時間約3分)を行った。

#### 4. 研究成果

動機づけと動機づけ方略の記述統計と信頼性係数から、本調査の協力者は英語学習に対して一定程度の動機づけを有しており、その強さは授業が進むごとに上昇する傾向にあったことが明らかとなった(1回目から2回目:  $t = -2.11$ ,  $p < .05$ ; 2回目から3回目:  $t = -2.01$ ,  $p < .05$ )。また、動機づけ方略全般に対しては肯定的な認識を持つ一方、動機づけ方略1「動機づけの基礎的な環境」についてはそのような傾向がより顕著に見られた。このことから、対象となった学生は、教室内には学び合いを支える雰囲気醸成されていると感じていたことが示唆された。

つぎに、クラスター分析を用いた結果、本研究の対象となった学生70名は、動機づけ傾向の異なる3つのクラスターに分けるのが妥当だと判断した(各クラスター間における動機づけの合計得点には、統計的に有意な差が見られた( $F = 38.76$ ,  $p < .001$ ))。これらのクラスターに属する学習者の動機づけの変化と動機づけ方略との関連を調べたところ、学習者の動機づけ特性によって、有効な動機づけ方略は異なる可能性が示唆された。

そこでの結果、ならびにインタビュー調査の結果を踏まえ、学期後半における授業の指導計画の修正・変更を行った。例えば、各学習者グループの動機づけの変動と動機づけ方略1(動機づけの基礎的環境)との間には一定程度の相関(それぞれ  $r = .33$ ,  $.44$ ,  $.62$ )が見られたこと、またインタビュー調査においてクラスの雰囲気が授業に対する取り組みに大きな影響を与えていることが確認できたことから、後半の授業では引き続き、教室内に「楽しく、支持的な雰囲気」(Dörnyei, 2001)が醸成されるように工夫した。また、質問紙調査とインタビュー調査の結果から、とりわけ第3クラスター(動機停滞グループ)に属する学習者にとっては、授業における明確かつ具体的な目標設定の重要性が改めて浮き彫りとなった(第3クラスターの動機づけの変動と動機づけ方略2(学習開始時の動機づけ喚起)との相関は、 $r = .81$ )。そこで各授業においては教科書の本文に加え、それと関連したタイムリーな記事を英字新聞から入手した。その上で、両者の比較・対照を行うなどして、「どうしてこの英文を読むの

か」、「なぜ、この英文を読む必要があるのか」を理解できるような活動を積極的に取り入れた。さらに、教科書の各ユニットで提示されている到達目標を黒板の左端に板書し、授業終了時まで残しておくといった工夫を通じて、各授業においてどういったことが求められているのか、学生がよりはっきりと認識できるように配慮した。

最後に、上記の指導実践は学習者ののちの動機づけにどのような影響を与えたのか検証した。まず、各クラスター内の変化を見てみると、第1クラスター、第2クラスターは引き続き高い動機づけを維持していた。一方で、動機づけの停滞が確認されていた第3クラスターでは、2回目(平均3.80)から3回目(平均5.27)の調査にかけて、統計的に有意な動機づけの向上が見られた( $t = -4.64$ ,  $p < .001$ )。したがって、質問紙調査、インタビュー調査の結果を踏まえて計画・実施された学期後半の指導実践は、すでに高い動機づけを有していた学習者の動機を減退させることなく、動機づけが伸び悩んでいた学習者の動機を高めることに成功していたと考えられる。

さらに、各クラスター間の変化を見てみると、1回目、2回目ともにクラスター間には統計的に有意な差が確認されたものの(それぞれ、 $F = .38.76$ ,  $55.85$ ; 多重比較の結果は、第3クラスター < 第1クラスター < 第2クラスター)、3回目の調査においては第1クラスターと第3クラスターには有意な差が見られなくなった( $F = 5.62$ ; 多重比較の結果は、第3クラスター、第1クラスター < 第2クラスター)。このことは、授業開始時には明らかに動機づけが低かった学習者グループ(第3クラスター)が、授業終了時にはすでにある程度動機づけを発達させていた学習者グループ(第1クラスター)と遜色ない変化を遂げたことを示している。以上の結果から、動機づけ評価の診断的活用を取り入れた英語カリキュラムの改善は、とくに動機づけに停滞・減退傾向の見られた学習者にとっては有効に機能した可能性があると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ①Hiroyuki Matsumoto, Tomohito Hiromori, & Akira Nakayama (2013). Toward a tripartite model of L2 reading strategy use, motivations, and learning beliefs. *System - An International Journal of Educational Technology and Applied Linguistics*, 41, 38-49, 査読有。

- ②廣森友人 (2013) 「自律学習の処方箋：自律した学習者を育てる視点」 *中部地区英語教育学会紀要*, 42, 査読有.
- ③ Akira Nakayama, Hiroyuki Matsumoto, Neil Heffernan, & Tomohito Hiromori (2012). The influence of goal orientation, past language studies, overseas experiences, and gender differences on Japanese EFL learners' beliefs, anxiety, and behaviors. *Apples - Journal of Applied Language Studies*, 6, 19-39, 査読有.
- ④Tomohito Hiromori, Hiroyuki Matsumoto, & Akira Nakayama. (2012). Profiling individual differences of successful and unsuccessful L2 readers. *The Journal of Asia TEFL*, 9, 49-70, 査読有.
- ⑤廣森友人 (2012c) 「大学の英語クラスで行う到達目標標準拋型の指導と評価」『英語教育 10 月増刊号』東京：大修館書店, p. 46-48, 査読無.
- ⑥廣森友人 (2012b) 「ペア・グループ活動を多用した学生主体型のリーディング授業」JACET 第 2 次授業学研究特別委員会 (編) 『高等教育における英語授業の研究：学習者の自律性を高めるリメディアル教育』 pp. 61-62, 査読有.
- ⑦廣森友人 (2012a) 「英語学習者の動機づけを高める指導実践：動機づけ評価の診断的活用」*ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, 23, 361-372, 査読有.
- ⑧廣森友人 (2011) 「動機づけ研究の成果は、外国語教師に何を教えてくれるのか？」*上智言語学会年報*, 25, 110-127, 査読無.
- [学会発表] (計 13 件)
- ①廣森友人 (2012b). 「自律した学習者を育てる英語指導を考える」 青山学院大学英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会. 招待講演. 東京：青山学院大学. 2012/9/8.
- ②廣森友人 (2012a). 「自律学習の処方箋：自律した学習者の育てる視点」『学校英語教育を考える 3 つの視座：成長する教師・自律する学習者・進化する授業』第 42 回中部地区英語教育学会岐阜大会 (シンポジウムでの招聘講師). 岐阜：じゅうろくプラザ. 2012/06/30.
- ③廣森友人 (2011b). 「アジアで教える日本語・英語：学習者の多様性に迫る」北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院公開シンポジウム『アジアで第二言語を学び教える研究集会』(シンポジウムにおける講師). 札幌：北海道大学. 2011/11/12.
- ④廣森友人 (2011a). 「効果的な外国語学習・指導を考える：普遍性と多様性の観点から」国際言語文化学会第 7 回大会. 招待講演. 山口：梅光学院大学. 2011/10/15
- ⑤松本広幸・中山晃・廣森友人 (2011) 「L2 読解における読解方略と動機づけ、学習観の関係：共変動モデル構築へ向けて」全国英語教育学会 (JASELE) 第 37 回全国大会. 山形：山形大学. 2011/08/20.
- ⑥Tomohito Hiromori (2011). Uncovering the profiles of good L2 readers: From a holistic perspective. Poster presented at *The 9th Asia TEFL International Conference*. Korea, Hotel Seoul KyoYuk MunHwa HoeKwan. 2011/07/28.
- ⑦Kimberly Noels, Tomohito Hiromori, & Tomoko Yashima (2011). Motivation from the perspectives of teachers and learners. Symposium held at *JALT CUE 2011 Conference: Foreign language motivation in Japan*. Japan, Toyo Gakuen University. 2011/07/03.
- ⑧Tomohito Hiromori (2011). Motivational design for effective second language instruction. Invited talk presented at *JALT CUE 2011 Conference: Foreign language motivation in Japan*. Japan, Toyo Gakuen University. 2011/07/02.
- ⑨ Akira Nakayama, Hiroyuki Matsumoto, Neil Heffernan, & Tomohito Hiromori (2011). The influence of past language studies and overseas experiences on current EFL learning of Japanese university students. Paper presented at *New Dynamics of Language Learning: Spaces and places - intentions and opportunities*. Finland, University of Jyvaskyla. 2011/06/08.
- ⑩Tomohito Hiromori (2010). What are the determining factors of L2 improvised speech performance? Paper presented at *the International conference: Language teaching in increasingly multilingual environments - From research to practice*. Poland, University of Warsaw. 2010/09/17.
- ⑪廣森友人 (2010c) 「継承語学習に対する意欲調査のための質問紙を作ってみよう」母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会 (ワークショップにおける講師). 京都：立命館大学. 2010/11/07.
- ⑫廣森友人 (2010b) 「動機づけ研究の成果は、外国語教師に何を教えてくれるのか？」上智大学言語学会第 25 回大会. 招待講演. 東京：上智大学. 2010/07/17.
- ⑬廣森友人 (2010a) 「外国語学習における動機づけ：個人差の観点から」日本独文学会

2010 年春季研究発表会（シンポジウムにおける講師）。東京：慶應義塾大学。  
2010/05/29.

〔図書〕（計 2 件）

- ① Tomohito Hiromori (in press). (2013).  
Motivational design for effective second language instruction. In M. Apple, D. D. Silva and T. Fellner (Eds.), *Foreign language learning motivation in Japan*. Bristol, UK: Multilingual Matters, 404-429.
- ② 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人（編著）  
（2010）『成長する英語学習者：学習者要因と自律学習』東京：大修館書店。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

廣森 友人 (HIROMORI TOMOHITO)  
明治大学・国際日本学部・准教授  
研究者番号：30448378